

県立美術館へ行こう!

阿蘇家文書修復完成記念 阿蘇の文化遺産展への招待

稲葉 継陽

いま、本学の附属図書館、文学部、社会文化科学研究科、教育学部等のスタッフは、熊本県立美術館等の方々と「阿蘇家文書修復完成記念展実行委員会」を組織し、本学所蔵の『阿蘇家文書』全巻出展を目玉とする展覧会の準備を進めています。

題して「阿蘇家文書修復完成記念 阿蘇の文化遺産展」。

熊本城二の丸の県立美術館本館2Fの展示室をいっぱいを使用し、文化庁や日本古文書学会、熊本県文化協会、阿蘇市町村会、さらに県内主要マスコミも後援に加わった、大規模な展覧会となる予定です。期間は平成18年（2006年）9月8日（金）～10月22日（日）の一ヶ月半です。

『阿蘇家文書』をご存知ですか？

『阿蘇家文書』は、阿蘇市（旧一の宮町）の阿蘇神社の宮司（旧大宮司）家に伝来した極めて貴重な古文書群です。文書は全304通、鎌倉・南北朝期（13・14世紀）を中心に、平安末から幕末期に及び、34巻に成巻されており、その大部分が原本で、わが国有数の中世文書群たる内容を備えています。

阿蘇神社は火山神として早くから国家的信仰の対象となり、平安時代末期には肥後国の一宮として甲佐・健軍・郡浦三社を末社とし、その宗教的権威は広く肥後一国に及びました。社領も阿蘇・飽田・詫麻・益城・宇土・八代の五郡に及び、大宮司阿蘇氏は肥後有数の武士団（在地領主）

として発展しました。

12世紀末に鎌倉幕府が成立すると、初代執権の北条時政が阿蘇本末社領の管理権を獲得して大宮司の上に立つことになったので、鎌倉期の『阿蘇家文書』には、時政・義時・泰時など執権北条氏歴代の発給した貴重な文書の数々が含まれることになったのです。



元弘三年七月十日 上島惟頼着到状(足利尊氏花押)

南北朝期（14世紀）になると、建武政権（南朝）も武家方（北朝）も阿蘇大宮司の勢力を高く評価し、多くの所領を寄進するとともに、内乱のなかで軍勢催促を行いました。これに対し、大宮司一族も多様な対応を示したので、『阿蘇家文書』には南北両朝が発給した極めて内容豊富な文書が含まれ、内乱期の九州の政治状況を知る上でもっとも重要な史料群となっています。

さらに南北朝～室町期の分には、本末社領に関する土地関係史料が多く含まれており、神社領や九州荘園さらに九州地域における成立期の村共同体研究の上でも、類例なき歴史情報を提

供しています。また、戦国期の政治状況を示す文書や、阿蘇社の造営・祭事関係史料も少なくありません。

以上のように第一級の内容をもつ『阿蘇家文書』は、日本中世の社会経済史、政治史、宗教史にわたる学界状況を牽引するような研究を生み出す源として利用され続けています。

『阿蘇家文書』の大部分は、昭和30年代に熊本大学の所蔵となりました。次いで昭和62年（1987）には、その学術的・文化的価値が評価されて、国の重要文化財に指定されることになったのです。

全巻を出展する画期的な展覧会

熊本大学移管直後の本文書群の成巻は、文書保存上かならずしも適切でなかったため、重要文化財への指定を契機に、文部省（当時）及び熊本大学当局の理解を得て、京都の表具職人の手で、毎年2～3巻ずつ重要文化財にふさわし

い太巻の軸装へと仕立て直す作業が継続されてきました。

その修復作業は平成17年度をもって全34巻が完成し、附属図書館貴重書庫に収蔵され、研究・教育に利用されています。本展覧会は、修復

完成を機に、本学スタッフと熊本県立美術館との共同作業によって企画されたものです。

展覧会は本学と附属図書館にとって、大きな意義を持つものです。

(1) 文化資源の保有・活用機関としての本学の位置のアピール

明治以来の高等教育制度の確立過程において、中世や近世の文献史料群を収集した大学は数多く、さらに文書史料の収集と公開を目的とした文



桐箆筥に収められた『阿蘇家文書』

書館等も各地に設置されてきました。

しかし、『阿蘇家文書』や『永青文庫細川家文書』のように、極めて学術的価値の高い大量の中・近世文書群を、その文書群が形成された現地において、しかもそれらを構成原形態のままに管理し活用している機関は、熊本大学附属図書館の他にはごく数例をかぞえるだけです。しかし残念ながら、こうした本学及び附属図書館の位置についての一般認識は、まだまだ高いとはいえません。

本展覧会は、県民に親しみ深い県立美術館を会場として、県内主要マスコミの後援をうけ、さらに全国の日本史研究者を組織する「日本古文書学会」の大会を本学キャンパスに誘致して開催されます。

それは、本学及び附属図書館の文化資源保有・活用機関たる独自の位置を地域社会と学界に強く、確実にアピールする機会となり、その効果が本学・附属図書館の研究・教育・文化資源収蔵機関としての充実の条件へとはねかえってくることにもなるでしょう。

(2) 地域社会への学術的発信と貢献

昭和30年代の移管以来、『阿蘇家文書』は本学内外の研究者によって利用され、多くの研究成果が蓄積されてきました。また、国費と大学予算を投入した本文書群の修補事業は、文化資源の管理と活用についてのモデル的な一事例として、ひろく参照されるべきものです。

県立美術館という開かれた施設における展示



修復完了した『阿蘇家文書』

会、シンポジウム、図録刊行を通じて、これらの成果を県民と地域の文化・経済諸団体にわかり易い形態でもって示すことは、熊本県における代表的な研究教育機関としての本学にとって、まさに使命であると考えます。

さらに、本展覧会を通じて示される学術的成果が、諸自治体の文化行政や、地域の歴史文化を活かしつつ取り組まれている諸事業の進展等に寄与することにもなるでしょう。

(3) わが国の歴史学界への発信

すでに述べたように、『阿蘇家文書』は単なる地域史料群ではなく、中世武士団、荘園制、内乱期の政治史、中世村落史、中世宗教史、さらに中世国家史に及ぶ、わが国の中世史研究が主要な対象としてきた諸研究課題をカバーする歴史情報を含んだ、第一級の中世文書群です。また大部分が原本であることから、古文書学上の研究対象としても多くの研究者から注目されています。

展示期間中に黒髪北キャンパスで開催される

「日本古文書学会」の大会には、多くの研究者が参加します。それら参加者の閲覧に『阿蘇家

文書』全巻を供することは、わが国の歴史学界への大きな発信となります。

大学と美術館とのコラボレーション

現在、実行委員会メンバーは具体的な打ち合わせを重ね、展示プランを検討中です。趣旨を理解された本学当局と熊本県からも十分な財政措置と支援を頂くことができました。本展覧会の画期的な一面は、大学と美術館とのコラボレーションによる、初めての企画であるという点にもあります。

本展覧会には、『阿蘇家文書』の他にも、県立美術館が長年収集してきた阿蘇地方の中世美術品、あるいは戦国時代の阿蘇氏の館から出土した遺物（熊本県所蔵）等も、併せて出展されます。まさに中世阿蘇の各種文化遺産をパッケージした内容となるのも、コラボのなせる技です。

そして何より強く感じるのは、大学スタッフと美術館スタッフという、異なる個性の融合が、文書史料の魅力ある展示プランを産みつつある

ということです。私たち大学スタッフは文献史料研究の専門家、美術館スタッフは文化資源を展示という手段によって市民に提供する技術と経験を蓄積した、プロ集団です。『阿蘇家文書』に関する知見・研究成果を私たちが美術館に持ち込み、それが展示のプロの手によって誰の目にも分かりやすい展示内容へと組み上げられてゆく。その過程に身を置いていると、今まで味わったことのない気持ちの昂りを覚えます。

それを象徴するのが、本展覧会のために編集作業を進めている図録です。そこには美術館スタッフが撮影した『阿蘇家文書』等、全文書のカラー写真が掲載されることになりました。『阿蘇家文書』研究の決定版、必携の1冊とも言うべき内容となります。これも、「文書群を中心とした展覧会の図録はどうあるべきか」という両者の議論があってこそ実現できたものです。

このように本展覧会は、文書史料の文化的価値の新しい発信方法を追求した、画期的な試みとなるものと思っています。

本学の教職員・学生の方々が一人でも多く来場され、『阿蘇家文書』の豊かな世界に触れられることを望んでいます。

いなば つぐはる
社会文化科学研究科助教授



熊本県立美術館